

令和5年度

大学生の力を活用した集落復興支援事業

伴走支援報告書

桜美林大学 AM 尾川/戸崎ゼミチーム

目次

1.	はじめに.....	3
2.	概要.....	3
3.	スケジュール.....	3
4.	実地調査について.....	4
4-1.	第1回訪問（2023年12月28日・12月29日）.....	4
4-2.	第2回訪問（2024年1月29日・1月30日）.....	4
5.	活動を踏まえて感じた課題.....	5
6.	今後の展望.....	5
6-1	高槻集落の象徴作り.....	6
6-2	SNS(主に Instagram)の活用.....	6
6-3	イルミネーション装飾のようなものを使用した地域の町興し.....	7
7.	終わりに.....	7
8.	参考文献.....	7

1. はじめに

私たち桜美林大学 AM 尾川/戸崎ゼミチームは、航空業界や観光業界、それらに関連する業界を卒業後目指す学生が所属し、日頃より地域創生や観光促進を交通や航空の観点から思考する研究を行っている。今回の「大学生の力を活用した集落復興支援事業（以下本プロジェクト）」には 7 名の学生が参加し、普段我々が研究を行って学習した知識を使用して集落活性化を伴走することを目的とした。本報告書では、今年度の活動内容とその結果、活動を通しての課題と今後について述べる。

2. 概要

昨年度までは本プロジェクトは桜美林大学内の別のゼミが担当しており、それらを引き継ぐことから 3 年目となる今年度は活動を開始した。3 年目となる筆者らのチームは再度二本松市高槻集落（以下高槻集落）の実態を調査し、来年以降実現可能かつ継続的に実施が可能なことを検討していき支援をしていくという伴走活動を実施した。

3. スケジュール

令和 5 年度に実施した活動は以下の通りである。

日程	活動内容
2023 年 10 月 11 日	ミーティング
25 日	集落の方とのミーティング
2023 年 12 月 28 日、29 日	実地調査①
2024 年 1 月 25 日	ミーティング
29 日、30 日	実地調査②
2024 年 2 月 5 日	ミーティング
17 日	活動報告会

4. 実地調査について

4-1. 第1回訪問（2023年12月28日・12月29日）

- ◎集会所にて高槻集落の方々と顔合わせ
- ◎今後の日程確認
- ◎農家民宿「まとば」にて宿泊

図1 農家民宿「まとば」



出所：筆者ら撮影

4-2. 第2回訪問（2024年1月29日・1月30日）

- ◎集会所にて高槻集落の方々と顔合わせ
- ◎炭作り体験

図2 炭作り体験の様子



出所：筆者ら撮影

- ◎ウッディハウスとうわにて入浴
- ◎集会所にて交流を深めながら夕食
- ◎農家民宿「まとば」・「いどばた」にて宿泊
- ◎高槻集落の方と共に集落を視察

図3 学生が話を聞きながら視察している様子



出所：筆者ら撮影

5. 活動を踏まえて感じた課題

高槻集落は学校や安定した収入になりそうな産業が少ないため 40 歳未満の若者が非常に少ない。集落の地区会長である、村松さんは「後 5 年～10 年が限界。だけど自分たちが生きているうちは何とか集落を持たせたい」と語っていた。高槻集落の方々は新たな産業を生み出すため、農業体験がしたい都市部の若者や日本の山間部での生活を体験してみたい外国人観光客に向けて「¹農泊」を促進していきたいが、なかなか思うようにはいかない。そのため、高槻集落では集落以外の人たちに高槻集落を知ってもらうことが急務である。

しかし、昨年まで行っていた取り組みではなかなか思うような効果が発揮されないのに加え今後新たに集落の宣伝を行うためには新たな技術を習得しなければならないため、高槻の方々も消極的になる一方である。

6. 今後の展望

¹「農泊」とは、農山漁村に宿泊し、滞在中に豊かな地域資源を活用した食事や体験等を楽しむ「農山漁村滞在型旅行」のこと。—農林水産省 HP より

上記にある課題を解決するためには高槻集落という場所が存在することを発信していくことが重要であり、そして高槻の人々が受け身ではなく自発的に活動が行えるものを考案していく必要がある。

今回我々は案として「視覚」によって「話題」を作り高槻集落という「場所」を知ってもらえる案を3点考案した。

1. 高槻集落の象徴作り
2. SNS(主に Instagram)の活用
3. イルミネーション装飾のようなものを使用した地域の町興し

6-1 高槻集落の象徴作り

高槻集落の集会所のすぐ近くに「たかつき」と書かれたモニュメントが存在しており高槻集落の中心かつシンボルとして形成されている。

図4 集会所近くの「たかつき」の文字



出所：筆者ら撮影

しかし、夏になると周囲が雑草で覆われてしまうため中々目立ちにくいという現状がある。そこで周囲の雑草を刈り、季節の花などを植えていくことで注目度をあげるだけでなく集落の中心的な役割を果たすことが出来ると考える。

6-2 SNS(主に Instagram)の活用

昨年まで使用していた「note」というツールはユーザー数こそかなり多いですが、日頃から確認しているユーザーは少なく手軽に見られるわけではないため、情報の素早い拡散が難しいと考える。それに比べ Instagram は都市部に住む筆者らにとって一番身近な SNS であるため若者層や外国人観光客への情報発信力は高いと考える。さらに「note」と違う点は Instagram 内にあるダイレクトメッセージ機能を使うことで、「双方向」でのコミュニケーションが図れることである。一方、課題としてはユーザー数や多いことや手軽に投稿できることから情報量が多いことが挙げられる。それらの情報の中に埋もれる事無く高槻集落の情報を伝えられるか、他の観光情報と差別化できるかが問題になってくると考える。

6-3 イルミネーション装飾のようなものを使用した地域の町興し

高槻集落では夏場は稲作をはじめとした農作業が活発に行われているが冬場は活発に行われているものが少なく、我々が現地を訪れた際に体験した木炭も社会的需要が減っており、産業として成り立っておらず、木炭を地域振興の観光資源として期待することは厳しい状況であると感じた。そのため冬場の高槻集落の目玉となる観光資源を探す必要がある。実際に、山梨県身延町西嶋地区では住民が町おこしのため自主的に作成したイルミネーション装飾が話題となり毎年2万人以上が訪れるようになったという事例も存在している。

図5 山梨県身延町西嶋地区のイルミネーションの様子



出所：<https://www.porta-y.jp/event/21227>

イルミネーション装飾は技術が無ければ難しい作業ではあるため、イルミネーションに限定する必要はないと考えるが、実際に成功した例もあるため「自分たちにはできない」と割り切らず挑戦していくことが重要になると考える。

7. 終わりに

今回我々が活動してきて1番感じたのは高槻集落の方々の暖かさである。これはどんな産業よりも希少性が高く価値のあるものだと考える。問題や課題は多々あるが間違いなくここには都市部や京都をはじめとした観光地とはまた違う魅力や体験が出来る場所である。

この先はどのように魅力を伝えていくかを軸に課題の解決や改善に取り組みたい。

8. 参考文献

- ・農林水産省ホームページ

[「農泊」の推進について：農林水産省 \(maff.go.jp\)](http://maff.go.jp)

・富士の国山

<https://www.yamanashi-kankou.jp/minobu/event/nishijimaillumination.html>

・身延町西島

<https://youtu.be/YWyiO6MXOg8?feature=shared>